

月報 2

「構造=機能理論の射程と限界」付録

1977年11月30日

*

最近ふたたび動きはじめた国際通貨体系が、また一段の円高ドル安を刻みつつある。のっぴらぼうの70年代、見るところまるでなしの70年代も、日常緩慢なゆえに之れと気付かぬことのないうちに、ゆめまごうことなく、かなり急角度な構造的地にリロツグけてきたに違いないことが、このようなとき、一瞬赤裸になる。この曲り角をすぎれば、日本は、いよいよもってきりめつきの帝国主義社会となるだろう。

円高不況の一入で、もうひとつの特徴的な事象は、社共を軸とする日本の旧左翼スロウの本格的な瓦解が、顕著になってきたことである。あきらかに、戦後は一巡してしまふところだ。戦後、社会党が一定の支持を得つづけたのも、そして、無能な第2勢力にどまらなかつたのも、社会党が、一貫して、弱い者の味方をしてきたからである。しかし、高成長の60年代、不況の70年代を通じて、いまや、ともともとの「弱い者」がいなくなりつつある。日本の「革新」勢力とは、体制が強い負性をかきあつめることによつて、かろうじてひとつの勢力たりえていたのであるが、(そして、負性があるがゆえに、決して、積極性へは転化しなかつたが、) どのような負性が、拡散しつつある。もともと無自覚な敗者復活戦組でしかなかったのだから、このようなとき、存続もなないのは、当然である。

国際経済学の基本定理によれば、自由貿易のもとで、各国の産業構成は、互いに最も効率的な分業をとげるように、特化していく。その調整は、急激な市場におけるレートの変動を介して、なされていくわけだ。織維など、いわゆる「構造不況」業種とは、このような特化の進行によつて、国内から消しとんどしまわなければならない

ような業種なのである。そのとき、どのようにかけがえのない生産活動であることも、ある一定の能率に達しないものを、人の後代にいくことができなくなる。度日すれど高効率な部門とのこして、相対的に能率の悪い(だが、堅実な)産業部門めらしめだされ、人々は、胡散臭い虚業部門へと、移動していかざるをえない。

20年前、エネルギー革命のときには、炭坑労働者が、叩き潰された。高度成長期以降、農村のじりじりと締めあげられ、都市へと流れてゆく。そして今度は、低効率の産業部門が、あとかたもなくなるうとしていふ。第三次産業のゆえ、より直接的消費されるサービス生産は、貿易の対象とならなから、特化の要域外にある。これら虚業は、国内で高効率部門がほじきだしたおこぼれにあずかるための、田配の機構でもあるのだ。(産業分類がどうあれ、各部門の労働の圧倒的な部分が産業化していることに、疑いはない。) 国内でのこうした地じりが、海外での、それと異なる地じりと、密接に結び合っていることを、見据えてかゝる必要がある。もはや、よい長な旧左翼の時代ではないのだから。

**

経済領域について、理論的に考えてみようといへば、どうしても、つぎの少くとも3つの問題を解きあかめなければならぬだろう。

① いわゆる、南北格差問題。——現在のような世界経済体制は、どのようにして、南北格差をつくりだし、あるいは、南北格差と不可分に結びついていっているのか? それは、いかなる性質の差別であるのか? そして、南北格差を最終的に解消することができような経済秩序は、どのようなものでなければならぬのか?

② いわゆる、成長問題。——資本制社会は、経済成長をやめることは、できないのか? 生態系との均衡を保つような経済秩序が可能であるとすれば、それはどのような経済秩序であるのか?

③ いわゆる、疎外問題。——資本制社会の経済秩序は、人々の行爲に、どのような偏倚をかけるをえないのか？ 経済効率を極端に低下させないで、しかも人々の生活と生の表現を十分に保証するような経済秩序がありうると思えば、それは、どのような経済秩序であるのか？

これらは、来世紀までの残る四半世紀に、せむとも解決をいつておかなければならない問題ばかりである。私が（として社会理論が）経済学をまなぐ実践的な理由は、さしあたりこれ以外に考えられない。（先進科学右へ放之式の良相を志向は、早晚危が割れるに決まっている。）新・旧左翼に限らず、日本の「進歩」的思想から「保守」的思想に至るまで、おれひとつとして、これら①～③にわたる課題に、なだひとつこたえていないのだから。

もっとも、既存の略理的な経済理論に、こうした、本来経済学がそのかなりの部分を処理して然るべき問題に関しての行きとどいた議論や的確な問題視点を期待するほうが、無理というものかもしれない。それは、現に生起しつつある経済事象のなかにおりたて、その核心的な部分を理論化することによって発展しているというよりは、ありあわせの互めかしい、論理整合性のために単純に抽象化された経済モデルを、さまざまにいちくり直して目先をかえている、というのが、実際のところに近いのだから。

“記号空間論”のフロンでは、原理論に相当すべき部分で、言語論、事物論、商品論、貨幣論を、重層させたから論じ、そこで厳密な基礎づけを与えるようにして、経済諸範疇を用意する。その上で①～③の諸論に一貫した見通しを与えるような、資本制空間論（特殊記号空間論）を構想しよう、という仕掛けになっている。

社会理論は、現に存する社会秩序の存立機制を明瞭に刻出するものであるなければならないが、その資格が経済諸範疇によつてつかまいることにはなるのは、当然である。ゆれゆれの時代は、とりわけ経済的時代である、それゆえ、ゆれゆれの時代の社会理論は、資本制社会の理論である。しかし、ゆれゆれが現存する時代をこえてすす

もうとするならば、資本制社会論を、たんに経済諸範疇から描きだしていくことは、できない。社会理論が（“記号空間論”がそうしているように）より原理的な水準を用意して経済諸範疇を再構成してゆくことは、理論が批判理論であるためにとらなければならぬ、必須の構成であるのだ。

« “記号空間論” が済んだら、つぎは何をやるのか？ » というようなことを、訊かれることがある。このようなときには、尋く者の素朴な疑問と、わたしの馴の思いこみとの、おれの大きさに、歯がみに似たおもいが湧き上がってくるのを、どうしようもない。これに、どう答えられるというのだろう。“記号空間論” というフロンは、わたしの社会理論のおべて存のであり、わたしが自分の仕事に与えた名称なのだ。わたしの満足するような形に“記号空間論” が仕上がったならば、わたしにとつて本質的な（理論的）問題はひとつのこらお片附いてしまったのだから、もうわたしは社会学なんをやっていいしなないだろう。（その時に向をやっているか、いまから判っているわけじゃない。他にやりたいことがあるのに我慢して、いま社会学をやっている人じゃ、ないんだ。何かやりたいことが別にある位なら、こんな苦勞はしないよ。骨を埋める気があるからやっている人を、どうでないとしたら、社会学ごときに首をっこんだりせず、さっさと辞めてしまった方が、誰のためにもいいのだ。）だから、“記号空間論” が成功してしまつたら、その瞬間にしたいと思つたことを、わたしはやるのであつて、いまそんなことは、知つたこつちやない——そういう幸せがわたしを實際試れるとは、到底、期待できそうにないが。

で、“記号空間論” のフロンは、そのうち行き詰まるだろう（何が原因で行き詰まるか、あらかじめめりかきぐらいいなら、そこで行き詰まったりしない）。そうしたら、そのとき、わたしは“記号空間論” を叩きこめて、何か別のフロンを据えようとするだろう（あ

るいは、もう筆録してしま、ていて、そんな力ものこってないか
もしれない)。とにかく、“記号空間論”は、ダメであるとはっきり
あるまではとつまずきあう、というプランなのだ、わたしにとっ
ては。

そうすると、はじめの問いには、何とこたえればいい？ —《向
にも》“記号空間論”とともにあるかぎり、わたしは、もはやや
りることが何もなければ、もはややれることが何もなければ、そのいずれ
かを終局としてむかえるほかなければならぬ。

* * * * *

今日の小論（「構造＝機能理論の射程と限界」）は、“記号空間
論”の草稿群としては、8作目にあたる。このペースでいくと、“
記号空間論”のあらましを膨らだすのに、たっぶり10年はかかって
しまう計算になる。それではたまらなないので、何とかしなければなら
ないが、いまのところよい知恵はない。（一巻の名案は、就職し
ないことだが、なんとなくその気になってしまっているもので、あまり
その辺のことは考えないことにしている。それに、表文稼業でし
ぬぐい、ヒモになる、監獄を喜ぶ、……などと想いめぐらしてみても、
いろいろ問題がある。就職より有利であるとは、どうも考え
にくいの）

「構造＝機能理論の射程と限界」は、題目のとおりの内容であ
る。で、“記号空間論”の内容をなるべく簡便に提示しようとする試みは
性質である。や、積道の感もあるが、方法論上、社会理論とし
てたつ“記号空間論”が、せむ論じておく必要があると思われている
議論なのだ。機能論は、もっとも素朴で自然な発想であるし、それと
自覚して排除するのでもない限り、理論のなかのどこにでもはいる
こんでくる。（見よ「欲求」論などは、あえてその如だと言ってお
こう。）たしかに、機能という概念は、いろいろの局面で有効であ
り、機能論理論がなくならないものでもない（その必要もない
）。しかし、わたしが自分独自のプランを立てなければならなかつ

た理由のひとつは、機能論理を中心にあえて構成される社会理論に
どのような未来もみることができなかった（あるいは、みとめる気
がしなかった）から、である。（これは、社会学を知ってまもなく
直観して以来、10年以上にもわたって、わかることのないわたしの
基軸である。）今回の小論では、“記号空間論”が、いかにして、
機能理論とありえぬのかを、機能理論にできるだけ内包して、
明らかにしようとしてみた。しかし、まだまだこの程度では、到底
論点を納得のいくまで説明につまみめたというにはほど遠い。また
の機会をまちたい。

* * * * *

11月には、別に「位相空間論」（70枚）というのを、ちょっとまと
めたりしたので、またまた予定が大きくずれてしまった。読み
たい本、読まなければならぬ本、ある仕事は、山積している。し
かし、いまさら焦ってみてもはじまらないので、じたばたあること
は、あまい。

今後の作業の予定だが、これまでの経験だと、次にこれをやるん
だなどと公言してしまうと、かえってそれに縛られすぎて、時間が
有効に使えない、という傾向があるようなので、こころばらくは、
行きあたりばったり、なりゆきまかせで仕事をしてみることにしよ
う。

今回の小論や、“記号空間論”の作業全般について、さまざまな立場
の方々からの、意見、批判、そのほかを、切望しています。

橋爪大三郎 (Hashizume Daisaburo)

〒248 鎌倉市村木座5-9-11

Phone 0467-22-1030

郵便振替 横浜 51782